

文學博士 島津久基 著

釋評源氏物語

卷四 若紫

東京 矢島書房 藏版

對譯源氏物語講話 卷四

昭和十五年三月七日第一刷發行
昭和廿二年九月二日訂正第五刷印刷
昭和廿二年九月九日訂正第五刷發行

定價金七十圓

著者 島津久基

發行者 矢島進

印刷者 藤本角太郎

發行所 東京都豐島區 矢島書房

高松三丁目八番 會員番號A三三〇二番

配給元 東京都神田區 日本出版株式會社
淡路町三ノ

藤本印刷・關山製本

宣長翁の源氏全講は、第三回目だけは十三年に亙つたが、第一回と第二回とは各々大凡八箇年が費された。源氏物語鑑賞會は今年でその八年になつたが、牛の歩みで漸く夕霧卷に入つた。まだ前途はかなり遙かである。その夕霧卷の講義半ばにやつと講話の第四卷は脱稿したのだつた。口譯文はこの鑑賞會の講義筆記と、物語日本文學「源氏物語」(上下)で試みたものが土臺になつてゐて、それに推敲が加はつたものである。

卷一の「はしがき」にも、古典の現代譯の難事業たることを述べたが、年を逐うて此の感は愈々深い。原文の現代口語への直譯が直ちに決して眞に古典の現代譯ではないことは、外國語の翻譯に於けると同じである。出来る限り原典の形とことばとを尊重して、それを現代に活かすことに最大の留意を拂ふべきは言ふまでもないことであるが、原文の姿を崩さぬことにだけいくら忠實であつても、それが現代文として通ぜぬものになつては、それこそ虎を描いて猫にだも類せざる滑稽で、第一、原作に對して私は深く愧ぢる。例へば、原作に無い語句などはなるべく補足しないといふのが、もとより理想ではあるが、時代が異なり、風俗も思潮も同じでなく、用語の意義慣行も變移がある以上、最少限度の補足や削減を施すのは許されねばならない。一見極めて無造作に簡略な形に見えて、實は内

に非常な深いものを含んでゐたり、或は現時の用語と形だけは同じでも、意味は全く別様に用ゐられてゐたりして、それを現代語では——特に私の凡庸貧困な使語範圍では——簡単に言ひ現せない爲、思ひ切つた補足によつて初めて原作の眞意に近いものを譯出し得る場合は實に夥しい。紫式部のやうな幾重もの感情の眼をいつも持つた心境の作者にあつては、殊にさうである。が、それが即ち現代化であると信する。又新しい語句に引直した爲に、古典語から直接生ずる雅趣が失はれ、全作品の品位を幾分毀損することがあつても、これ亦已むを得ないとせねばならぬ。そこまで言へば、現代語に譯することそれ自體已に無用であり、原文を直接味讀する他、正しい鑑賞の方法は絶対にあり得ないこともわかりきつたことである。かうは言ふものの、生來の不文と、時折の婆心とに禍せられ、原文の妙味に比して、冗漫な蛇足を添出して來る場合のあることを否み得ないのは、省みて私かに忸怩たるものがある。なほ本巻には、稚拙な生々しい現代語譯を以てすることによつて、原作の夢幻美と複雑な意圖とを傷け誤る結果を來すのを懼れて、わざと口譯文を省略し、比較的詳しい語義の解明を以て之に代へた僅少の箇所のあることを附言して置く。

講話の第一巻を出してから早くも十年の歳月が流れた。病と公私用とに煩はされなかつたら、もう五十四帖の三分の一ぐらゐは筆が運んでゐたであらうのにと考へると、返す／＼残念でならない。漸く稍少閑を得る身となつたので、本年こそはと、若紫から花宴までを二巻にして年内に執筆上梓する

企畫を立ててゐたのであつたが、今春遽に腎盂炎を病んで二月近くを床中に送り、且その豫後亦思はしからず、一年の上半期を殆ど意味なく過して、豫定がぐんぐんおかれてしまつた。而も病閑には斷えず少しづつ筆を進めて、遅延に遅延を重ねながらも、兎も角若紫の一卷だけは書き上げることが出来た。そこで末摘花巻と合冊にする筈の最初の豫定を變更して、取敢へず此の一帖だけを先づ印刷に附することにした。思へば併し評釋の蒜園のあるじに比べると、また私は恵まれてゐる。測らざる病臥の頓挫に遭つて、末摘花から花宴までの勞作こそ、なほ追ひ到つてゐないけれど、廣道大人は夕顔巻板行後は、惜しくも痼疾の爲に、心にまかせて筆を振ふことが出来なくなつて來られたのであつた。若紫巻の語釋のはしがきに、

この六年あまりがほど、中風にて手を病みたりければ、板下をかく事だにえせず。源氏の評釋たえむとする事いとうれはしくかなしかりけり。これによりて、さきに彫せつるちうさくをものして、まづかくなん五巻の草紙とはなしたる。語釋をも別にせんとおもひしかど、はつかばかりのほどなれば、ついでにこゝにとりそへつ。次の巻々よりは人の手にかゝしめたれば、いたうかはりたるになん。

左ながらに

文久のはじめの年なが月

廣道

しるす

とある。五巻とは若紫から花宴までの四帖と、餘釋・語釋合一巻、計五巻をいふのである。そして次の末摘花巻の語釋からは、明らかに板下の手が變つてゐる。「源氏の評釋たえむとする事いとうれはしくかなしかりけり」とある一句と、「左ながらに廣道しるす」の擱筆の文字は、まことに悲痛そのものである。そしてこれから三年の後、行年四十九歳を以て長逝されたのであつた。私は本年が恰もその同じ四十九の齒である。藥餌に親しむ折はあつても、亦慢性の執拗な神經性疾患に苦しみながらも、先づは何とか筆は執れ、身體の自由も利くのを、朝夕感謝せず居れない。そして今年は一寸足踏み状態であるが、年々漸次に往時への元氣と體力とを取戻して來つゝあることに、衷心の悦が湧く。大人の達成された花宴巻までの完遂に及ぶの日も遠からず、更に葵・賢木を超えて、須磨・明石を目ざす行手にさへ、おふけなき希望がかけられる。

茲に同じく病弱の驚才に鞭うつて、この先覺の踵を接がうとする後學の一寒生にとつて、今この巻四の刊行を見るに當り、一段の勇猛心を奮ひ起さしめられつゝも、感慨轉禁じ得ざるものがある。

昭和十四年十月

著 者 識

校正の半ばに突如復もや病に仆れ、痼疾に加ふるに餘病をも併發し、焦躁呻吟すること約月餘、

竟に全く筆硯を廢し、校正も爲に中絶するの已むなきに至り、益々廣道大人を偲ぶ切なるものがあつた。而も漸く茲に恢復を見、全齋の確信を日に加へつゝ、嬉しくも人手を借ることなくして一卷を校了するを得て、床上頓に肩の輕きを覺える。

(十二月十七日追記)

一部の中に紫の上の事をすぐれて書き出でたる故に、藤式部の名を改めて、紫式部と號せられけり。一説に云、藤式部の名幽玄ならずとて、後に藤の花の色のゆかりに、紫の字に改めらるゝと云々清朝朝臣の説也、或説云、一條院の御めのご子なり。上東門院へまゐらせらるゝとて、我がゆかりのものなり、あはれと思召せ、と申させ給ひけるによりて此の名あり。武藏野の義也ともいへり。

對譯

源氏物語講話 卷四 目次

若紫卷

わらはやみ	一
巖の中の聖	八
明石の噂―新發意のいつき娘	七
雀の子	五
なにがし僧都―昔語りの宵	六
佛の御しるべ―困惑の尼上	七
優曇華の君	八
花の陰の管絃	九
繪にかきたる物の姫	一〇
小さき結文	一六
暗部の山	一三
鶴の一聲―尼上の病床	一三
忌の後の或日	一四

霰の夜・霜の朝（宿直の光君・妹が門）……………一五

民謡「いとしあの子の」（口譯妹が門）……………一五

兵部卿の宮……………一六

惟光の使……………一七〇

常陸歌―冷き女君……………一七五

民謡「常陸では」（口譯常陸歌）……………一七六

二條院へ……………一七九

かはゆきまらうど（小さき限り、殊更に参れ）……………一八四

ゆかりの若草……………一九三

失望の宮・北方……………一九六

珍らしきかしづきぐさ……………二〇〇

釋評索引……………卷尾

語義索引……………卷尾

挿

圖

御物源氏物語圖屏風（左隻）（若紫）傳狩野永徳筆（帝室博物館藏）……………（口繪）

釋 評 目 次

若 紫 卷

瘧病に患ひ給ひて……………一

紫上生立物語……………二

「若紫やさぶらふ」——卷名と作者——本巻の

成立年時——「かの上」と紫の君——源氏物

語の創作と發表……………二

寺の様もいとあはれなり……………八

明るく一節——雨月物語の「蛇性の姪」……………一〇

「船の行者とその准據」……………二

高僧の驗徳說話——慈惠僧正——宇治大納言

君は行ひをし給ひつゝ……………二七

源氏の繪心と畫才——須磨・明石兩卷の伏線……………三三

明石入道の遺言——宇津保の俊蔭と蜻蛉日記

——明石上と古物語及び作者の影——正三

起首の無造作——瘧病と夕顔卷……………五

「なにがし寺」と准據——鞍馬寺か志賀寺か……………六

古歌の詞句……………七

物語の一話——信貴山縁起……………一二

「なにがし僧都」のモデル問題……………一五

位物語……………二七

良清の本性——良清對明石上と惟光對夕顔上

——良清の人名……………三五

地か詞か——中島廣足の「うつり詞論」——芭

蕉の芳野紀行……………三七

「思ひ残す」の意義と慣行——源氏物語遠鏡……………三八

「ゆほびか」論——舊註と廣道説の是非……………三九

日もいと永きに……………四〇

著名な「雀の子」の段——紫の君の髪——作者

雅名の來由……………四一

大君——爲氏の即興——上東門院の上童か——

—いぬきとあてき……………四二

童名の「き」——一品宮の童女——てゝき……………四三

打臥し給へるに……………四四

小柴垣の外から内へ——青年源氏の心境——

夢物語の俄才覺——伊勢物語からの示唆……………四五

源氏の教育趣味——良質の適格者の發見——

君は心地もいと惱ましきに……………四六

孤兒の相縁——反應なき交渉……………四七

盛衰記と雨月物語——宇津保物語の影響……………四八

「母こそ云々」は良清の詞か否か——新舊諸註

の検討……………四九

「情なき人云々」の解——國司説・良清説・娘

説・後見説・母説……………五〇

北山の逍遙と品定の回想……………五一

「若草」の歌並びに垣間見と伊勢物語——胡蝶

巻と總角巻……………五二

宇津保の大宮と紫の君——大和物語の一話……………五三

「のゝしる」の用法と小楠補遺の謬見……………五四

僧都の語氣——小楠補遺説の批判……………五五

「たゞなるよりは」の慣行例と在來の解……………五六

諸註の典據論——多武峯少將物語……………五七

「ひがごと」の意味——「うかで」「いで」か——

……………五八

……………五九

……………六〇

……………六一

——岷江入楚本の問題——「二を兼ねたる」と

——武笠氏の新説……………二

御迎への人々参りて……………二

從臣等の動靜……………九

稚拙な「て」の重疊——「ともかうも」の巧みな

御車に奉るほど……………九

花下の管絃と光君の引立役——樂徳説話の故

事——宇津保の山中樂……………九

金輪王の出現と鈴屋大人の雜詰——天眞の名

君は先づ内裏に……………一〇〇

苦手の舅君——木偶細君の稀世の引歌——無

效果教育——葵上と末摘花……………一〇三

紫日記の辨の宰相——中川の宿の空蟬——雲

居雁の畫寢……………一〇四

「思はずに」は地か詞か——河内本の助證……………一〇六

かの若草の……………一〇六

可愛い結文——尼君の返歌の眞意……………一二一

「さしぐみに」考——宣長と眞淵——餘滴と蜀

山鈔——山水と涙の縁語……………八

反復……………八

藥師佛の瑠璃の壺——小櫛の偏見……………九

評語……………九

北山行直前の源氏の居所……………九

「問はぬはつらき」の引歌——見舞狀か言辭か……………一〇七

「まれ／＼は」の詞句に對する廣道の提言——

舊註の解……………一二一

「命だに」の引歌とその解釋……………一二三

「聞え煩ひ」の二解——武笠説と卑見……………一二四

難波津と淺香山——萬葉の原歌と大和の歌物語……………一二六

藤壺の宮

一三三

廣道の絶讃——作者の眞剣味と嚴肅な倫理意

露と細流抄——須磨謫居の豫示——俊蔭卷

識——冷靜な現實擬視とその詩化——最高

の夢合

の榮貴への楔

藤壺の印象——至純の愛

占夢の構想——蜻蛉日記との關係——萬水一

かの山寺の人は

一三三

三轉の心理——本段の壓卷「鶴の一聲」

位置推定二案——夕顔卷との重複感

「六條京極わたり」と御息所邸——大納言邸の

「物深き」の意

十月に朱雀院の行幸

一四二

朱雀院の行幸と紅葉賀

日か二十日か

祖母の忌服——湖月抄頭註の検討——暇三十

「渡す」の用法と正解

君は上を戀ひ聞え

一五一

初對面——紫の君の描寫

衣の間か物越しか——實澄の御簾越し説

「たけくらべ」と本段の對比——一葉と源氏物語

「肌むき」の語義——「肌さはり」否定——廣道

後朝ならぬ後朝——豫期を裏切つた「妹が門」

の謬説——遠鏡の口譯

——細流と小櫛——苦心の文案

「けり」と「ける」

彼處には

一六七

宮・乳母・紫の君三人三様の心情——特異の薫

—— 臭への瞬時の疑惑

一六九

君の御許よりは

一七〇

智者にも不可解の主君の肚裏

一七一

「此の御事」の内容

一七二

「大夫」備考——大夫と諸大夫

一七三

「いと煩はしう」の接續

一七四

君は大殿におはしけるに

一七五

女君との對照

一七六

常陸歌の漫吟——葵上への皮肉

一七七

君は如何にせまし

一七八

夕顔卷との對比

一七九

「思ひやり」の解義

一八〇

昔物語の姫盗み——作者の新手

一八一

二條院は近ければ

一八四

二條院の朝——鬼の居ぬ間

一八二

東洋民族の通念

一八九

訓育第一步——女性の理想——紫女の信條と

「にびいろ」か「ひいろ」か——「出でて」と「居て」

一九〇

君は二三日

一九二

純真無垢の紫の君——至妙の筆——成心作者

實方集と紫式部

一九五

の童心

一九六

かの留まりにし人々は

一九八

夕顔卷との相似——宮北方の心理表現——功

利主義の繼母——蕃山の既成繼母氣質觀

一九九

神隱しの謎の解かれた日……………一六九

やうく人參り……………二〇〇

例の廻轉式手法——「後の親」への親昵……………二〇一

評 括……………二〇二

宣心文學の一篇——作者の遊神——童話文學

玉鬘卷……………二〇三

紫上と藤壺——明暗表裏……………二〇三

評釋の結筆論——無造作な卷首との呼應……………二〇一

卷名の來由——眞淵の既成語論と廣道の紫紅

對偶論……………二〇三

「若紫」の複義——本卷の獨立値……………二〇三

紫と明石——作者の用意……………二〇四